



白い春



遊戯

白い春

白い春 written by *yugi*

第1章 ～始まり～

暖かい春の陽気の中だった。

草木も芽生え、新しい命が誕生する。そんな暖かい春の日……

優(ゆう)：「さてさて……どうしたものか。」

白石高校1年生の青沼優は、学校の屋上でふけていた。

「ガタンっ」

突然ドアが開き、ドアの向こうから、女子高生があらわれた。

優：「また来たのか……。」

ナナ：「うん。ここにくるとね、なんだか気持ちが軽くなるの。そういう優君はどうしてよくここにくるの？」

優：「まあ……色々あってね。」

ナナ：「色々って？」

「キンコンカンコーン」

学校の修行前のチャイムがなった。

優：「おっ、授業だ授業。戻るぞ。次はあの厄介な林先生だ。」

優は逃げるようにしてナナの横を通り過ぎていった。

ナナ：「もう。いつも何も言ってくれないんだから……」

～授業中～

優：(全く・・・こんなことをしてる場合じゃないのに・・・)

林先生：「では、この文から読み取れる主人公の心情を誰かに聞いてみようか。今日は4月22日だか

ら・・・」

優：(よしっ！俺の名簿番号は1番。4,2,2じゃ絶対回ってこない♪)

林先生：「じゃあ、出席番号1番。青沼。」

優：(そうそう♪俺は1番だから聞かれることは・・・んっ?)

林先生：「青沼。お前だよ。」

優：(いやいやいや・・・)「えっと、自分、出席番号1番なんですけど・・・」

林先生：「まあまあ。気にするな。はやく答えろ。」

優：(ならあの4月22日はなんなんだよ・・・)

「えっと・・・。どうして自分ばかりがこんな目に合わなくてはいけないのだと思っています。」

林先生：「うん。そんなところだろうな。では次の文章を・・・」

優：(よし。これでもう俺に回ってくることはない。しばらくは安心だな。)

林先生：「青沼。」

優：(そうそう♪俺は1回答えたからもう聞かれることは・・・んっ?)

「いや、あの・・・。自分1回答えたんですけど・・・」

林先生：「そうだったか。まあいいじゃないか。早く答えろ。」

優：(てめ・・・)

「えっと。運命には逆らえないから、諦めようという気持ちです。」

林先生：「よし。きちんと理解できているな。」

優：(なにがよしだよ・・・)

クラスみんなはくすくす笑っていて、場にはどこにでもある、柔らかい空気が漂っていた。

白い春2

「キンコンカンコ〜ン」

下校のチャイムが鳴り、優は帰路にたった。

優：「さて……。いくか。」

優は顔をこわばらせ。

すると目の前にナナが現れた。

ナナ：「優君、今日こそ一緒に帰ろっ♪」

満面の笑みで優に話しかけてきた。

優は引き締めた顔を緩め、。

優：「悪いな、今日も無理だ。」

ナナ：「また？いつもじゃん？なんで？」

今日こそはといわんばかりにナナは優に詰め寄った。

優：「まあ……。色々あってな」

そう言って優は、屋上のときと同じようにナナの横を通りぬけていった。

ナナ：「もう……」

優は回りに誰もいないのを確認し、廃校になった学校に入っていった。

そこには暗く、重い空気が満ちていた。

優：「戻ったぞ。」

優の顔は学校でのそれとはまるで別人になっていた。

BB(ブルーバード) : 「おかえりウィザード♪ それじゃ今日も頑張りますか♪」

20歳ぐらいの女性が満面の笑みで優を迎えた。

優 : 「ファングはどうした？もう先にいったのか？」

BB : 「うん♪ 10分前にね♪」

優 : 「そうか。なら俺たちもはやくいこう。」

そうって2人は廃校を出て、夕暮れの世界に入っていった。

優 : 「この辺だな。」

優たちは人気のない山奥にきていた。

BB : 「うん♪ ファングも多分この辺に・・・あっ！いたいた♪」

BBの指さす先には、岩石のような体をした大男がいた。

優は小走りでその男のもとに向かった。

優 : 「遅くなったな。」

ファング : 「いや。それより・・・」

ファングは面倒そうな顔をにじませた。

優 : 「どうした？」

ファング : 「相手さん。この小屋に閉じこもったまま、でてこないんだ。」

ファングの前には小さなコンクリート製の小屋がひっそりとたたずんでいた。中には人の気配がある。

優 : 「壊せないのか？この小屋。」

ファング：「さすがにコンクリは無理だ。どうする？まあ時間がたてば出てくるだろうが・・・」

優：「面倒だな。仕方ない。」

優は靴の中から針金のようなものを取り出し、鍵穴に入れた。

ファング：「ピッキングか。お前そんなこともできるのか。」

優：「まあな。」

ファングは関心するように優の手さばきを眺めていた。

そして数秒後

「カチッ」

鍵が開く音が、静かな空気に響いた。

するとその瞬間

「うわあ〜」

怒号のような奇声を張り上げた男が、ドアの向こうから優に突進してきた。

優：「おっと。」

優は予測していたかのように軽くその男をかわし、足をかけた。

「ドンっ」

男は優の足にかかり、勢いよく転んでしまった。

ファング：「まあまあ。そうあわてんなよ。」

ファングはあざ笑うかのように男を見つめた。

男：「頼む・・・！俺はそんなつもりはなかったんだ！許してくれ！なんでもする！なんでもするから！」

よく見ると中年の男だった。結婚しているのだろう。手には指輪がかけられている。どこに

いる。ごく

ごく普通の男。そんな男が、地べたに這いつくばって異常なまでの怯えを見せている。

ファング：「黙れ。」

ファングは威圧するように男を見下げながらいった。

男：「頼む。子供もいるんだ。頼む・・・」

振り絞るように出した声に、もはや気はなかった。

すると優は一瞬のうちにポケットからハンカチを取り出し、男の顔を覆った。

男：「なっ・・・」

たちまち男は意識を失い、地べたに体を横たわらせた。

ファング：「クロロホルム。お前なんでも持ってんだな。」

優：「まあな。それより・・・。メテオ、遅いな。なにをしているんだ。）

そういつてから数分後、一台の黒い車が轟音をたてて優たちの後ろに止まった。

メテオ：「いや～、赤信号守るとやっぱ遅れるな～。」

細見の男がそういういながら車をでてきた。

優：「はやく乗せろ。」

捨てるように優は言い放った。

メテオ：「はいはい。しょうがないなあ～」

メテオは眠らせた男を引きずり、投げるように車にのせた。

メテオ：「じゃ。連れてくね～。」

黒い車は再び轟音を立て去っていった。

優：「ふう。」

安堵の息が優からこぼれた。

BB：「お疲れ様♪それじゃ、帰ろっか♪」

BBは優と腕を組んだ。

優：「ああ。じゃあファング、お疲れ。」

ファング：「お疲れ。」

そうやって3人はその場を後にした。

白い春3

～BB宅～

優：「悪いな。いつも泊めてもらって。」

BB：「いいのよ♪あたしウィザードといると楽しいもん♪」

優：「そりゃどうも。」

優は部屋から窓を眺めた。

BB：「学校はどう？友だちできた？」

優：「お前は俺の親か。」

BB：「そんな気分♪」

優：「普通だよ。成績も友人関係もなにもかも。」

BB：「そう。ならよかった♪」

優：「なあ・・・BB。俺たちいつまで・・・」

BB：「何？いやになったの？」

優：「そりゃ気持ちの良い仕事じゃないからな。」

BB：「そうね。でもウィザード。あたしたちは逃げられないんだよ。この世界からは。」

優：「まあ・・・な。」

優は諦めるようにして再び窓の外の世界に目をやった。

白い春4

ある日の夕暮、廃校で・・・

優：「今日もあるのか？BB。」

BB：「うん♪ はいこれ写真♪」

BBは一枚の小さな写真を優に渡した。

優：「名前は？」

BB：「中島健二。なんか結構ひどいことしてるみたい♪」

ファング：「と、いうと？」

BB：「脱法ハーブに犯罪すれすれの詐欺。わけわかんない商材を売りつけ被害者は何十人。」

BBは読み上げるように男の経歴を語った。

優：「なんでこういう人間が次々と現れるのやら・・・」

ファング：「で、どこにいるんだ？」

BB：「東新町って書いてある♪」

優：(東新町・・・どっかで聞いたことあるな。)

BB：「ウィザード？どうしたの？」

優：「いや。なんでもない。東新町なら歩いていける距離だな。メテオに連絡しといてくれ。」

BB：「了解♪」

優：「じゃあ、いくか。」

3人は東新町に向かった。

優：「また、始まるのか・・・」

優はあきらめるように吐き捨てた。

白い春5

第2章 ～転機～

～東新町～

優：「よし。丁度暗くなってきたな。」

ファング：「ああ。」

2人は大きなマンションの前に立っていた。

メテオ：「でもどうする？このマンションセキュリティ結構厳しいよ～？」

優：「マースを呼んである。多分もうすぐハッキングできるはずだ。」

メテオ：「抜かりないね～。さすがさすが。」

そういった瞬間、優の携帯がなった。

優：「ハッキングが完了したようだ。いくぞ。」

優、BB、ファングはマンションに入り、メテオはマンションの前で車を止めて待っていた。」

BB：「さすがマース♪簡単には入れたわね♪」

ファング：「時代の進歩は怖いね～。」

優：「確か108号室だったな。108、108・・・。ここか」

3人は108号室の前に立ち止まり、優は呼び鈴を押した。

優：「郵便で～す。」

優はいつもの声色を変え、明るく元気そうな声を出した。

すると中からは男が出てきた。

男：「郵便？」

がドアを開けた瞬間、優はハンカチで男の顔を覆い、一瞬で眠らせた。

優：「よし。」

ファング：「楽勝だな。」

ファングはあざ笑うかのように言った。
が、その瞬間。

「カッカッ」

廊下から靴の音が聞こえてきた。

ファング：「おいッ。まじかよ。」

ファングの得意げな顔は一転、追い詰められた人間の顔に色を変えた。

BB：「どうするウィザード？」

優は予想通りといわんばかりに不適な笑みを浮かべ、眠らせた男を部屋の中に引きずりこんだ。

BBもファングを優に続いて、あわてるように部屋に入っていった。

部屋に入るなり優は落ち着いた様子で口を動かした。

優：「BB、窓を開けてくれ。」

BB：「窓って……。どうするの？」まさか？」

優：「いいからはやく。」

優は命令するような口調でBBにいった。

BBはすぐに窓をあけた。

優：「ファング、この男を投げ飛ばしてくれ。」

ファング：「おいおい。それじゃ死んじゃうだろ。」

ファングは呆れるように言った。

優：「下を見てみる。」

ファングは言われるがままマンションの下を見ると、そこには大きなクッションをつんだメテオの車があった。

ファング：「さすがだね～。それじゃ……。よいしょっと！」

ファングは男をマンションの外へ力いっぱい投げ飛ばし、多少離れた車の上のクッションど真ん中に落とした。その後すぐさまメテオが男を車に入れ、クッションも車の中にどうにか押し込んだ。」

優：「その怪力もさすがだな。」

ファング：「脳みそ使う代わりに体使ってるもんでね。」

優：「ふっ。さて、仕事はこれで終わりだな。帰るか。」

BB：「そうね♪2人ともお疲れ様♪」

ファング：「じゃ、そうしますか♪。」

3人は安堵の表情に顔色を変え、マンションを後にした。

が、マンション前には思いもよらぬ人物の姿があった。

白い春6

～マンション前～

優は目の前の光景に絶句した。

優：「ナナ・・・。」

優は思いもかけず声ももらした。

ナナ：「優・・・？」

ナナも信じられないといった表情で優を見つめた。

優：(そういえば・・・東新町。ナナの住んでるところだったな。だがまさかこのタイミングとは。)

ナナ：「今の・・・何？」

ナナのその言葉に、優はすべてを悟った。

見られていた。人がいないと確認をしたつもりだった。だが見られてしまった。

BB：「マネキンよマネキン♪あたしたち洋服屋さんやってて♪下まで降ろすの面倒だから投げちゃおうって
なったのよ♪」

BBは反射するように言い繕ってみせた。

ナナ：「うそ。あれ、完全に人だった。ねえ優。答えて。今何をしていたの？それにウィザードって
何？」

ファンク：「面倒な空気になってきたな。どうするウィザード？ここで眠らせれば、夢だったで済むかも
しれないぞ。

ファンクのその言葉にナナは身構えた。今目の前にいるのは自分の”敵”なのだとナナは本能的にそ

れを察した。

優：「ダメだ。」

ファング：「じゃあどうするんだ？このまま逃がしたら俺たち終わりだぜ？」

ファングは質問するように優に問いかけた。

優：「・・・仕方ない。」

優は決心するようにナナを見つめた。

優：「こいつを仲間にしよう。」

優の言葉に空気は一変した。

BB：「本気なのウィザード？彼女は一般人よ？それにいつばらされるかわからないのよ？」

BBは訴えるように優に言葉を投げた。

ファング：「俺もBBと同意見だ。今後こいつが裏切らないという保障はどこにもない。逃げられてから

じゃ遅いぜ？」

優：「仕方ない。こうなったのも俺が原因だ。俺に任せてくれ。責任はとる。」

ファング：「これだもんな・・・」

BB：「ウィザードがそういうなら従うわ♪」

優：「すまないな。」

ナナは今日の前で何が起きているのか分からなかった。ただ1つ。自分の身から危険因子が消えたということだけは理解できた。

ナナ：「一体・・・あなたたちは何なの？」

優：「話はBBの部屋でしょう。人に見られたくない。」

そうって4人はBBの部屋へと向かった。道中、誰も口を開く者はいなかった。

第3章

～明かされる真実～

～BBの部屋～

優：「さて、何から聞きたい？」

ナナ：「なにして・・・」

ナナは戸惑っていた。いつもと違う優。ウィザードと呼ばれている理由。マンションから落ちたあの男。そして目の前にいるBBとファング。なにもかもが脳の中で暴れまわっていた。

BB：「まあ・・・急にこんなことになったらそうなるわよね♪ とりあえずこれでも飲んで♪」

見るに見かねたBBが紅茶を差し出した。

ナナ：「ありがとう・・・ございます。」

美味しい紅茶だった。温かく、少し甘い味がした。 ナナは自然と落ち着きを取り戻していった。

優：「じゃあとりあえず自己紹介でもするか。こいつはBB。あいつはファングだ。」

優は指さしながらそれぞれを淡々と紹介した。

ナナはあの紅茶のおかげだろうか。何だか勇気がでてきた。一番聞きたかった。そして一番恐れている質問に手を伸ばす・・・

ナナ：「・・・。みんなは、あのときなにをしていたの？」

優の表情が少しこわばった。

優：「俺たちはメビウスという集団だ。そして俺たちの仕事は・・・」

聞きたくなかった。聞いたのは自分だ。でも怖い。何か聞いてはいけない気がする。ナナは突然恐怖に駆られた。

優：「復讐代行だ。」

ナナ：「復讐・・・代行？」

優：「ああ。」

ナナは言葉だけでどんな仕事なのか予想できた。そしてそれはナナの心を尽く痛めつけた。

優はそれを苦にもせず説明を続けた。

優：「まず、ゴーストと呼ばれる人間がいる。まあ俺たちはあったことはないが・・・そいつが依頼を受

ける。そしてその依頼を俺たちが実行する。BBはそのマネージメントを、ファングと俺はナナが見た

ように、復讐相手を眠らせ、メテオという男がそいつをある場所にする。まあ簡単にいえばこんな流れだ。」

ナナ：「ある・・・場所って？」

海の底とか、樹海とか。話の流れ上そんなところじゃないかとめぼしをつけていた。だが優の口からでたのは、そんなところではなかった。

優：「エンジェルヘル。天使の地獄という場所。」

ナナ：「どういう場所なの？」

優は自分のポケットから携帯を取り出し、画像を出した。そこにはナナの創造とは全く別物の世界があった。

ナナ：「なに・・・ここ・・・」

そこはただただ白い部屋だった。ホコリ1つない。誰もいない。何もない部屋。

だがその意味をナナは一瞬にして読み取った。

優：「ここでやつらは一生を過ごす。まあ長くて一週間程度だが。」

ナナ：「それじゃ……。優たちがしているのは……」
自然と涙がこぼれた。あの優が。どうしてこんなことを……

優：「まあ。そういうことだ。」

あっさりとしたその口調にナナは怒りを覚えた。

ナナ：「そういうことって……。人殺しじゃない！ダメだよこんなこと！」

ナナは優の胸ぐらをつかんだ。
だがその恰好とは裏腹に、手に力は入っていなかった。

ナナ：「どうしてこんなことを……」

優：「俺たちが復讐を行う相手はそれ相応の人物だ。マンションの男は脱法ハーブに詐欺。あいつのせい

で何人もの人間が命を落とした。今回は多分その遺族からの依頼だろう。」

ナナ：「ならっ……。なら、警察に言えば良いじゃない。なんで優たちがそんなことをするの？」

優：「なら、ナナ。自分の親が同じ目にあったらどうする？自分の大切な人間がハーブに侵され、それが

原因で命を失ったら。今の日本の法ではやつらを極刑にすることはできない。それでもお前は満足

か？刑を終えたらそいつは自由。また笑顔で生きていくんだぞ？」

優はナナに問い詰めた。

ナナ：「それは……」

何も言い返せなかった。自分だったら。もしそんな集団がいたら。お願いしてしまうだろう。そんな弱い心が自分の心にはあるんだと、そのときナナは始めて悟った。

優：「まあそういうことだ。ちなみにだが、ここでは俺のことはウィザードと呼んでくれよ。」

ナナ：「なんで？優は優でしょ？別に良いじゃない。」

優：「青沼優は俺の本当の名前じゃない。そもそも俺には名前なんてない。」

ナナ：「どういうこと？学校だって優は優じゃない。」

優：「俺は・・・、いや、俺たちは捨て子なんだ。生まれてすぐ施設に預けられた。だから名前なんてあ

るわけない。青沼優は偽名みたいなもんだ。もちろんBBもファンクもメテオも。そしてその施設の

創始者が、さっきいったゴースト。俺たちはその施設で育ち、ゴーストの指示で今のメビウスを

作った。」

ナナの心にはもやもやした、黒い霧のようなものが現れていた。

急に優が別人に見えてきた。今までの青沼優は、ナナの記憶からは静かに消えていった。

第4章

～砕かれた結束～

あの衝撃の事実から数か月がたった。

優とナナは学校では仲良く会話することもなくなり、あの屋上に誰もくることはなかった。

放課後は廃校になった学校でゴーストの依頼を受け、その後優、ファンク、BB、ナナで依頼を遂行するの

が日々の日課になっていった。ただ、ナナは何もしなかった。優の後ろに立ち、できるだけ相手を見ない

ようにしているだけだった。そんなナナをBBやファンク、メテオは何もいわず優しく見守り、血なまぐさ

い案件のときは、ナナを外したりもしていた。ナナは慣れないながらも、メビウスの人間の人柄にどこか

心地よさを感じ、なんとかやっていけていた。メビウスには家族のような温かい空気が広がっていた。

だが・・・

事件は起こった。

優、BB、ファンク、ナナは眠らせた男を、ゴルフケースに入れ、マンションの部屋から出ようとしていた。そのゴ

ルフケースは、少し離れたメテオの車に歩いて持って行く予定だった。マンションの前に車を止めることができな

いのと、警備員が立っていることから、そうしたのだ。

優：「これで終わりだな。それじゃ、帰るとするか。」

BB：「お疲れ様♪」

ファング：「疲れた疲れた。」

ナナを含む4人はいつも通りの終わりを迎えていた。だが・・・

ファング：「おい・・・」

ファングが急におびえた声を発した。

優：「どうした。」

大きな体から発されたか細い声に、優も不安を覚えた。だがその不安は一瞬で恐怖に変えられた。優は自分の目を

疑った。白と黒の車。車の上の赤いランプ。2台、3台、5台・・・もっている。10、15・・・

それらの車は優たちがいたマンションの前に止まり、中からはおぞましい数の警察が出てきた。

一瞬のことだった。マンションの周りを警察が囲んだ。

警察：「君たちは完全に包囲されている。大人しく出頭しなさい！」

拡声器から発せられる怒号が優たちの耳に響いた。

ファング：「どういうことだウィザード！」

優：「そんな・・・。馬鹿な。なぜここが。」

優はどんなときも下準備は怠らなかった。付近の住人の行動。警察の巡回。地形。帰る経路でさえ気を配っていた。

だがしかし、今の優の目の前にあるのは、その準備すら打ち砕く光景だった。

BB：「どうする・・・優？」

優：「仕方ない・・・。みんな耳を貸せ。」

優は3人に耳打ちをした。

ファング：「思い切った賭けだな・・・。まあしかたないか。」

BB：「そうね。このままいてもつかまるだけだわ。」

優：「よし。いくぞ。」

優たちは眠らせた男を部屋に残し、そろって警察の前に姿を見せた。

1歩、2歩・・・

警察の集団が優たちにじりじりと歩み寄ってきた。

そしてとうとうあと数m。そのとき・・・

優：「いくぞ！」

優はポケットから球状のものを地面に叩き付けた。その瞬間、あたりには煙幕が立ち込めた。

警察：「何っ！くっ。総員煙の外に出ろ！」

警察は視界の回復を図るべく、煙の外に出た。が、周りには優たちはおらず。やがて晴れる煙の中からも優たちは現れなかった。

～メテオの車～

優たちはマンション近くで待機していたメテオに電話をかけ、煙幕を抜け出したあと、すぐメテオの車に乗りこみ

その場を去った。

優：「助かったよ、メテオ。」

メテオ：「全く。こんなことになるなんて思わなかったよ。どうしたんだ？」

優：「わからない。どうやら俺たちの動きがばれていたようだ。」

メテオ：「そんな・・・一体誰が・・・」

車内では暗雲がたちこめていた。

もしかしたら・・・この中に・・・

～廃校の校舎～

メテオの車で廃校に着いた一同の間には、重く暗い空気が立ち込めていた。

もしかしたらこの中に情報をもらしている人間がいるかもしれない。

皆が皆その思いを胸の片隅に置いていた。

優：「仕方ない。みんな、携帯を見せ合おう。もし情報をリークしているやつがいたらきっと警察と連絡

を取っているはずだ。」

見るに見かねて優が端を発した。

ファング：「そうだな。このままじゃラチが開かない。」

BB：「そうね。でも発信履歴なんて消してしまっているんじゃない？」

優：「ああ。だからマースを呼ぼう。奴なら履歴を消してもすぐに復元できるだろう。」

ナナ：「マースって？」

優：「そういえば……。ナナには話してなかったな。マースは俺たちの仲間だ。」

ナナ：「ふうん……。」

それから数十分後、マースが廃校に入ってきた。

マース：「やあ。大変なことになったね。まさかこんなことになるとは……。」

優：「早速頼む。」

マース：「僕はいいけど……。みんなは良いの？もしかしたら仲間がいなくなるかもしれないんだ

よ？」

マースは確認するように、全員の目を見ていった。

優：「仕方ない。こんな状態では・・・」

BB：「私はなんの問題もないわよ。私は裏切ったりしてないもの。それにもしかしたら裏切りものなんて
いないかもしれないし。」

ファンク：「そうだな。単に他の誰かが盗聴してたってこともある。いや、むしろその可能性の方が高い
かもな。」

ナナ：「そうよね。この中に裏切りなんて。きっと盗聴されてたに決まってわ。」

みんなの思いは1つになった。盗聴されていた。これが彼らの希望だった。

マース：「わかったよ。じゃあ始めよう。まずは優から。」

優：「ああ。」

それからBB、メテオ、ファンクという順に携帯の履歴をくまなく調べた。

マース：「ファンクの携帯にも履歴はないね。残るは・・・。」

みんなの視線がナナに集中した。

ナナはマースに携帯を渡し、マースの解析が始まった。

マース：「えっ。」

マースの手が止まった。

優：「どうした。」

いやな予感がした。まさか。

マース：「みんな。そのナナって子を囲むんだ。」

そういった途端、ナナ以外の人間はすべてを悟った。

一瞬でナナの周りを全員が囲った。

ファング：「まさかとは思ったが・・・」

BB：「そういえばあなた、私たちの任務中にあったわよね。もしかしてあなた最初から・・・」

メテオ：「まあ。そういうことだ・・・」

優：「ナナ・・・どうして・・・」

みんなが輪の中のナナに声をかけた。

ナナ：「ちっ、違う・・・。私じゃない。何かの間違いよ。こんなこと・・・。私裏切ってなんかな

い・・・。ねえマースさん、もう一度よく調べて。」

ナナの声は震えていた。しかし彼女をかばう者など、誰一人としていなかった。

マース：「さっきから調べてるけど、何回も警察に連絡とってる記録しか出てこないよ。2か月以上前の履

歴を皮切りに、そこから何回もかけてる。

ファング：「2か月前って・・・」

BB：「ちょうど私たちがあなたに初めてあったときね。」

一縷の望みを消え失せた。

文字通りの絶望。とうとうメビウスの輪がほつれた。

それからナナはエンジェルヘルに連れていかれた。

そこには天使のように白い。何もない地獄が待っていた・・・

～エンジェルヘル～

何もない世界だった。音も、風も、ホコリーつない世界。

ナナ：「どうして・・・」

涙は出なかった。どうして自分が・・・。

～廃校～

優：「どうして・・・あいつが・・・。」

BB：「そういえば彼女、あなたと知り合いだったわよね？いつから？」

優：「俺が学校に入ってすぐ、屋上で出会った。」

BB：「そう。じゃあ・・・。最初からあなたを狙って。」

優：「・・・。」

優は信じられなかった。どうして・・・。腑に落ちないことはいくつもあった。最初からメビウスを壊滅

させるのが目的なら、もっと早くこうなっていたはずだ。それに自分の任務を初めて見たときのナナの顔

は演技のようには見えなかった。

優：「マース。別にお前の力を疑ってるわけじゃないんだが・・・」

マース：「わかってるよ、ウィザード。本当は彼女じゃないって思ってるんだろ？」

優：「頼む。どうしても信じられないんだ。」

マース：「了解。頑張ってみるよ。」

優：「悪いな。」

BB：「じゃ、私たちも彼女のために頑張らしましょうか♪。ね、ファング♪」

ファング：「優がここまで信頼していたやつだ。仕方がない。」

メテオ：「そうだね。彼女が餓死するまでに証拠を見つけよう。」

優：「悪いな。みんな。頼む。」

マース：「と、いっても……。どうするの？僕は彼女の携帯を調べるとして。」

優：「俺に考えがある。マース。ナナの携帯の履歴プリントしてくれないか。」

マース：「いいけど……。何に使うのさ。これが操作されて残った履歴なら意味ないんじゃない……」

優：「まあまあ。任せてくれ。」

マースは優の言われた通り、ナナの携帯の履歴をプリントし、優に手渡した。

優：「ありがとう。よしみんな。時間は限られてる。何としてでも頼む。」

それからメビウス丸となった捜査が始まった。

ゴーストの命令でナナに食べ物や飲み物を与えることは禁じられていた。つまり、ナナの命はもって3日。その短い制限時間は、メビウスに焦りといらだちを与えていた。

優：「くそっ。なんでだ……。」

ファング：「ちっ。ここもだめか……」

BB：「どうして……」

メテオ：「ここも違う……か。」

マース：「これも違う……」

なぜだろうか。メビウスの気持ちは再び一つになっていた。ナナを救いたい。その思いは一瞬一瞬強くなっていくばかりであった。

優：(絶対に見つけてみせる。あいつのために……。)

それから丸2日がたった。

～エンジェルヘル～

ナナは狼狽しきっていた。

ナナ：「優……。」

そしてとうとう3日目の朝を迎えた。

優：「あった……。とうとう見つけたぞ。」

～廃校～

優：「みんなみつけたぞ！」

ファング：「本当か。ウィザード！」

優：「ああ。これを見てくれ。」

優はマースからもらった携帯の電話送信履歴とメール送信履歴ををみんなに見せた。

BB：「これがどうかしたの？」

優：「ナナの友達携帯を借りて、本当にこのメールが送られたかどうか1つ1つ確か

めたんだ。そしたら、確かにメールは送られていた。だが、時間がずれていたんだ。」

ファング：「どういうことだ？」

優：「例えばこのメール。ナナの携帯の履歴に18時24分に送信したという履歴がある

んだが、相手の受信履歴には18時28分に受信したようになっているだ。」

BB：「じゃあ……。」

優：「ああ。この携帯が誰かに操作されていたという証拠だ。」

ファング：「じゃあこのことをゴーストに報告してすぐナナをあそこから出そう！」

優：「ああ。BB！ゴーストに早くこのことを連絡してくれ。」

BB：「ウィザード……。」

BBは自分の携帯を見ていた。

優：「どうしたBB。早く。ナナが待ってるんだ。急いでくれ。」

BB：「ウィザード・・・」

BBの目が徐々に赤く充血していった。

優：「BB・・・。どうした。」

BB：「ナナちゃん・・・ナナちゃんが・・・」

優：「ナナが・・・どうしたんだよ・・・」

BB：「間に合わなかったって・・・」

優：「そんな・・・。そんなわけあるか！誰からだ！誰がそんなこと！」

BB：「ゴーストから今メールがあつたの・・・」

優：「見せろ！」

優はBBの携帯を強引に奪い、映る画面に目を凝らした。

メビウスの諸君へ。

ナナは死亡した。その件について話がある。今すぐナナの部屋にこられたし。

ゴースト

優：「くそっ。メテオ！車を出せ！」

優たちはナナの待つエンジェルヘルへと向かった。

～エンジェルヘル～

優：「ナナ！」

ナナのドアを開けると、真っ白な部屋にナナは仰向けになって寝ていた。

優：「ナナ！ナナ！」

優はナナの体を揺り動かした。だが、ナナはピクリとも反応を見せなかった。

優：「おい……。ナナ！ナナ！」

名前を呼ぶたびに、揺り動かす力は強くなっていった。

BB：「優……。やめなよ……。ナナちゃんは……。」

優：「うるさい！ナナ！起きろ！来たよ！俺たち、お前が無実だって証拠、ちゃんと見つけたよ！」

ナナを握る拳は震えていた。

優：「ナナ……」

ふっと力が抜けた。

優：「ゴースト……。あいつのせいで……」

ナナの死を悟った瞬間、優の心はゴーストへの憎しみと変わった。

優：「マース！ゴーストがどこにいるか探せ！」

マース：「優。無理だよ。何度かゴーストの居場所を探したことがあるけど、全部だめだった。」

優：「いいからやるんだ！」

マースは優の威圧感に煽られ、仕方なくPCを開き、ゴーストの居場所を探した。

そしてほんの2分後のことだった。

マース：「えっ」

優：「どうした。わかったのか」

マース：「ああ・・・。」

ためらうようにマースは言った。

優：「どこだ。あいつはどこにいる。」

マース：「優……。優の携帯のすぐ近く。」

優：「俺の近くって……。」

マース：「待って。今から呼び出す。」

マースはゴーストの携帯に発信した。

その瞬間思いもよらない出来事がメビウスを待ち受けていた。

「ブー。ブー。」

鳴った携帯の持ち主は……

優：「なんで……。なんで……。ナナの携帯が……」

鳴ったのは紛れもなくナナの携帯だった。

恐る恐るナナの携帯を開くとマースの番号が書いてあった。

優：「どういうことだ……。」

そのときだった。

マース：「待って！今ナナの携帯から着信が！」

優：「着信？なんでだよ。ナナの携帯は今ここにあるんだぜ。」

マース：「これ、タイマー送信だ。ある時刻になると送信されるようになっているんだ。」

優：「一体誰が……。で、メールにはなんて……」

マース：「そんな……」

メビウスのみんなへ。

今更だけどみんなに自己紹介をするね。私の名前はナナ。そして2代目ゴースト。このメールが読まれているってことは、みんな私のためにメールの謎を解いてくれたんだね。本当にありがとう

。それだけで私は幸せだよ。でもそれはつまりもう私はこの世にはいないってこと……。こうなってしまった以上、みんなには本当のことを言わなくちゃいけないね。今から話すことはすべて真実。どんなにつらくても、みんなには受け止めてほしい。

私の父は初代ゴーストだった。私は小さい頃から父が何をしているのか知っていたわ。そしてメビウスの存在も。そしてその父が2年前に病死して、それから私は私が2代目ゴーストとしてみんなに指示を出していたの。誰ともわからない人に依頼を出すのは精神的にも参ったわ。でも父との約束でね。父が死んだら私がゴーストの役目を果たす約束になってたから……。

そして高校生になって、優がメビウスの任務をしていてびっくりしたわ。まさか優がメビウスの一員だったなんて……。

でも、正直嬉しい気持ちもあった。優が私の仲間だったんだもん。

ただ最近、とうとう私のミスで警察にメビウスのことがばれそうになってしまったの。前に警察に居場所がばれたのは実は私のせい。本当にごめんなさい。

でも大丈夫。知っての通りメールのデータも改ざんしたし、みんなの身元が分かるようなデータはすべて焼却したわ。みんなは何も心配いらぬ。ただ、すでに身元がばれてる私はそういうわけにはいかないの。私が生きていれば間違いなくみんなに迷惑をかけちゃう。だからこうするしかなかったの。本当にごめんねみんな。

これでメビウスは解散。みんな本当に今までありがとう。つらかったよね。ウィザードもBBもフアングもメテオも、そしてマースもみんな本当に今までありがとう。

これでみんなは自由の身だよ。これからは辛かった分幸せに過ごしてください。

みんなが今まで頑張った分の報酬は5億円。このお金は父の代から手を付けずに残してあるわ。メビウスが解散するときにみんなに分け合うことにしていたの。だからこのお金でみんな自由に過

ごしてください。

最後に。

ウィザード。ううん。優。名前の通り優しかった優。1度くらい一緒に下校したかったよ。

でも大丈夫。私はゴースト。いつもあなたたちのそばにいる。

いつもあなたたちを守ってる。

じゃあみんな。バイバイ。

ナナ

数か月後、気付けば季節は新しい春を迎えようとしていた。

思い返せば、ナナと初めてあったのもこの季節だった。

優：「ナナ・・・」

優は屋上にいた。

優：(そういえば、ここであいつに初めてあったんだっけな。あいつも、色々抱えてここにいたんだよな・・・。)

あの春もっていたものを、すべて失ったような気がした。今は何もない春。ナナに出会う前の、白い春。

優：「ナナ……」

その瞬間だった。

「優！」

～end～